

## 『礼に始まり、礼をもって行い、礼に終わる。』

茨城県

下妻剣志館

小学6年生

村田隼磨

ぼくたち下妻剣志館は、大会や錬成会に参加した時には、会場の玄関やトイレのはきものをそろえる事を心がけています。また、試合が終わって会場から出る時には、必ずトイレをそうじして帰ります。なぜそのことをするのかというと、ぼくたちは試合の勝ち負けよりも、おかげ様でという感謝の気持ちや礼儀作法、そして残心を大切にしたいからです。

剣道は、「礼に始まり、礼に終わる。」とよく言われます。その教えについて館長先生から、本当は「礼に始まり、礼をもって行い、礼に終わる。」という事が正しいんだよと教えていただきました。

ぼくはこれまでは道場に入る時に「お願いします。」と礼をして、けい古の始めと終わりに相手に礼をする。そして、けい古が終わって道場を出る時に「ありがとうございました。」と言ってから出ることが、礼に始まり、礼に終わることだと思っていました。もちろん、その礼も大切なものだけれども、けい古や試合の中で相手に対して、礼をもって行うことが大切なのだという事が、一枚のDVDを見た時に分かりました。

今年の、世界剣道選手権大会のDVDを見たときの事です。今回の世界大会は、日本が全部門で優勝することができましたが、その中でぼくはとてもおどろく出来事がありました。それは、女子個人戦の決勝戦で面を打った松本選手と、その面に対して胴を打った韓国の選手が接触して、松本選手が倒れてしまった場面です。

ぼくは、面ではなく、胴ありかなと思いましたが、次の瞬間、胴を打った韓国の選手が自分の打突後に十分な残心を示さないまま、倒れた松本選手にかけ寄り、手を引いて起こしてあげたのです。そのために、胴ありと判定されてもいい打突を、自分で取り消したことになったのだと思います。試合は、松本選手が引き面を打って優勝しましたが、もしも自分だったら、あの場面で同じようなことができたろうかと考えてしまいました。

その話を館長先生とした時に、かつて秋田県で行われたインターハイの決勝戦でも、竹刀を落とした相手に対して打ち込むことをしないで、落ちた竹刀を拾って渡してあげた選手がいた。その選手は、結果的には負けてしまったけれども、相手の選手と、会場で見っていた方々にフェアプレー賞をいただいたと聞きました。

剣道のルールでは、竹刀を落としたり、倒れた相手に対して、ただちに加えた打突は有効となっています。ぼくもこれまでの試合の中で、倒れたところを打たれて負けたことがあります。もちろん倒されてしまった自分が悪いのだけれども、しばらくは、何となくすっきりしない気持ちでいました。

そんなことを考えながら、韓国の女子選手が松本選手に対して、礼をもって行った行為を見て、試合に勝った負けたを超えた、立派な武道精神を見たような気がしました。

また、剣道の試合では、応援の人達が相手選手の反則に対して、拍手をする場面をよく見かけます。これは、応援する側として、礼があるとは思えません。もちろん選手を応援する意味での拍手だと思いますが、せめて反則の宣告をされてすぐではなく、「始め」の声の後にすればいいのではないかと思います。そうする事で、相手の選手はもちろん、応援している方々に対してもいやな思いをすること

がなくなると思うのです。

　　ぼくはこれからも剣道を続けていくうえで、試合中に倒したり倒されたりすることがあると思います。けれども、あの韓国の女子選手をお手本として、相手に対して、礼の心を大切にし、正々堂々と試合をすることができるような気持ちを持って日々の稽古に励みます。